

と幾度となく叫び続けたので、さすがの団長も最後は苦笑しながら「わかった。それまで君達が希望ならば大八洲と名付けよう」と言って命名して、大八洲開拓団が誕生したのが“大八洲”名称の由来であり、懐かしく当時がい出される。

この大八洲は、戦時中国内で愛唱した“身よ東海の空明け”からはじまる愛国行進曲のひとつだりにあることは皆も知ってのように、希望を抱いて大陸開拓に乗り出した我々若者は常々この曲に意気を感じていたので、透かさず発した文句であった。

その時居合わせた拓友は戦死などで既になく、自分一人生き残っているが、五年と短く終わった大陸開拓を日本で再起を誓ってから五十年、今は二世に託し余生を送る身となった。

そして、六十年近い歩みを顧みて、自分一人でここまで歩むことができたかと反省する時、誰もが思うのは開拓の父“親父様”と言って親しく信頼を寄せてきた佐藤初代組合長の貢献による賜である。

誰によらず公平に温かく接し、私利私欲は微塵もない卓越

大八洲二世としての思い出

両親が山形から守谷町に入植したのは、戦後まだ浅い昭和二十三年でした。私の子供の頃の思い出は共同生活で、食料

した開拓指導者に巡り会えた私は実に幸福であったと心から感謝している。さらに、その佐藤組合長の遺志を継ぎ、亡き後の組合を守ってきた代々の組合長をはじめ同志ならびに二世代の組合員の努力と協力により安心して日常の暮しができていることに對し本当にありがとうと申し上げたい。

中国政府の厚意により二回にわたり現地を訪れ、終戦後の避難途上亡くなった皆さんならびに我が一族の墓参を達成し、兄弟の四男坊として一人生き残った私が、兄貴達の代役としてその努めを果たし得たとやっと長年の胸の思いを撫で下ろすことができた。

流浪避難の当時のお母さん方、歩いた道も幾百里、乳幼児を背負い子供の手を取り、老人の面倒を見ながら、夜は野宿の皆さんが亡くなった道を辿り、只々胸が熱くなるばかり、言葉にならず、母は強しの一言でした。それから五十年余り、今はおばあちゃん達よ、これからの余生も何時までも強く愉快に送って、迎える五十周年祭には今は亡き同志の面影をグラスに浮かべ大いに祝い、故人を偲ぼうではないか。

梅津康則

不足など現在では考えられないような生活でした。

小学生に入学する頃は個人生活になったとのことでした。

父は事務所へ勤め、母が大原地区で畑作でスイカ、落花生、陸稲など作付していましたが思うようには収穫出来ず、収入も少なく、大変苦勞してきたと聞いていました。

高校を卒業したものの農業には関心がなく、後継ぎにはならず、いた昭和四十六年、父が突然に交通事故で亡くなり、母と二人おのずから農業を継ぐことになり、酪農を始めることになりました。牛を最初三頭導入し、第一歩から始めました。すること全てが初めて、お産、搾乳、作物作りなど本當に苦勞の始まりでした。

四十九年に結婚し、頭数も年々増加してきましたが、生計を立てるのは大變で、私は外に出て収入を得るための仕事もしてきました。

本格的に酪農に取り組むようになり、デントコーン、ソルゴー、秋はかぶ、イタリアンと作付し、収穫は共同作業で、二十年前はまだデントコーンなどは手鎌で一本一本刈り取り、耕うん機で運び、サイロのわきにカッターを取り付け、サイロの中に入り、真夏の農作業「麻袋をかぶり」サイロ踏み、今ではなつかしい思い出です。

その後、共同でコーンハーベスターを購入し、能率が上がりました。

現在はコーンサイレージに牧草はロールベアラで収穫し、

ラップマシンでラップしストックするようになり、酪農経営は安定してきました。

その矢先、予期せぬ問題、大原地区は住宅が多くなり、「動物はくさい」と環境問題がクローズアップしてきました。

我が家でもその対策として糞尿絞り機を取り付けたり、牛舎の回りを花いっぱいにして、見学に来られても汚いイメージがなくなるように心掛けています。

今は毎年、守谷中学生が社会勉強に來ていますが、匂いのことなどそれ程気にせず牛達にふれ、喜んで帰ります。

環境の問題は酪農家全員が気を付けなければなりません。大八洲五十周年、今後どのようなようになっていくことでしょうか。

私達の子供達は何も分からないことが多くなってきているのが現実で、受け継いでいって欲しいと思うところ、大八洲の良さと今後の在り方など、一世、二世の方々はより多くの家庭で伝えていって欲しいものです。

この地で生まれて私も四十七年。大八洲に育って良かったと思える今日この頃、地区の皆様とともに助け合い、農業を出来ることを喜び、大八洲が今後ともに発展して欲しいと願っています。